

谷中霊園

児玉 寛嗣

上野公園を抜け藝大の前を過ぎ、日暮里方面に歩くと谷中霊園がある。この場所は感応寺（現在は天王寺）の境内の一部であった。明治政府が寺から土地を没収し東京府の管轄として谷中墓地とした。以降、政治家、実業家、学者、芸術家や文人など多くの著名人も葬られてきた。それらの墓を訪れる人も後を絶たない。墓地の桜並木は花見シーズンには大勢の人で賑わう。犬の散歩をする近隣の人もよく見かける。

徳川慶喜の墓もある。堀で囲まれた一郭だ。門から覗くと饅頭のような半球形の特徴ある墓石が目を惹く。神式の墓である。代々の將軍は仏式であったが最後の將軍、慶喜は神式だ。すぐ近くの「伯爵勝精・伊代子」と書かれた墓標に目が留まった。これを見て勝海舟が爵位をもらった時の話を思い出した。彼は子爵だろうと思っていたのか「俺は五尺ある、四尺（子爵）なんかいらん」と言ったとか。それを耳にした伊藤博文が伯爵にしたとの話。真偽のほどは分からないが、いかにも人を食ったところのあった海舟らしい逸話だ。

精（くわし）という人は海舟とどんな関係にあるのか思い調べてみた。嫡男の小鹿が早世したため家督を継ぐ者がいなくなった。海舟は幕臣であったが明治政府とも繋がりが深かった。そのコネを使って徳川家の面倒もみていたようだ。そこで慶喜の子どもを養子にしたいと願い出してもらったのが、慶喜の最後の子、十男の精だった。家臣が將軍の子供を養子にするなど江戸時代には考えられなかった。隔世の感である。今は父の傍で見守るように眠っている。慶喜は写真機など新しいものが好きだったが、精もハレー・ダビットソンを乗り回すなどハイカラ好みだったようだ。ふたりは天国で5Gのスマホでもいじっているかもしれない。話は違うが大河ドラマの主人公、渋沢栄一の墓もこの霊園にある。今頃は慶喜とドラマの出来映を批評しているかもしれない。墓地を訪れて、葬られている人々に思いを馳せてみるのも一興である。